



ズワイガニ（日本海系群B海域）①

本州日本海沿岸におけるズワイガニのうち新潟県以北秋田県以南が本海域である。本海域の漁獲や資源量等の数値は漁期年（7月～翌6月）を示す。



図1 分布図

秋田県～新潟県沖の陸棚斜面 & 縁辺部（水深200～500m）に分布。産卵場は分布水深帯の浅い方にあり、各地に点在。島、天然礁がある急峻海域で、漁場は分布域に比べごく狭いと考えられる。

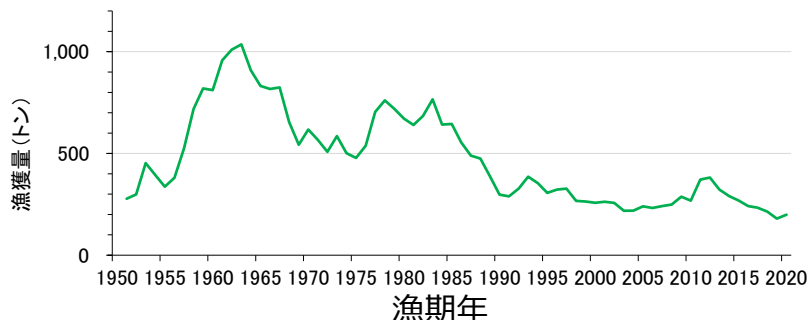


図2 漁獲量の推移（1998年以前は暦年の値である）

漁獲量には、1960年代に約1,000トン、1980年代に約800トンのピークがみられる。その後は減少し、1990年代以降は200～400トンで推移している。2020年の漁獲量は199トンであった。

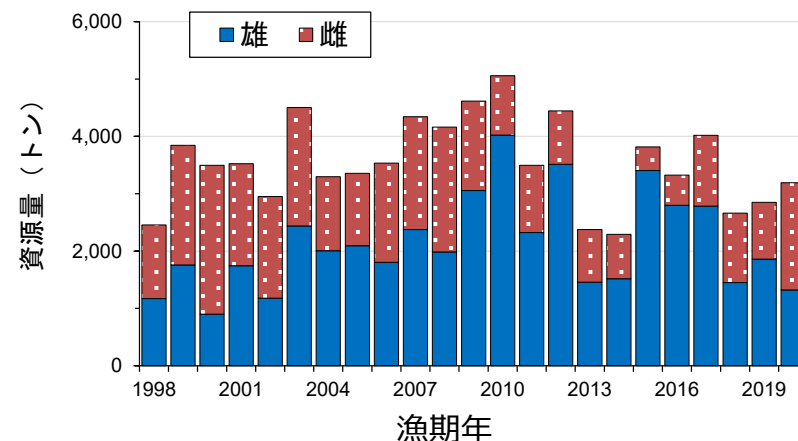


図3 資源量の推移

かご調査で推定した調査前漁期開始時点の資源量の推移を示した。雄は甲幅90 mm以上のカタガニとミズガニ、雌はアカコとクロコの合計を示す。雌雄合計の資源量は、1998年以降は2,300～5,100トンで推移している。2010年に5,000トンを超えたが、その後減少し、2014年は過去最低の2,300トンとなった。2016～2019年は2,700～4,000トンで推移し、2020年は3,193トンであった。



ズワイガニ（日本海系群B海域）②

令和3年3月に開催された「資源管理方針に関する検討会」および「水産政策審議会」を経て、本海域は再生産関係が不明であるため、MSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）を、加入量当たり親魚量が漁獲圧が0の場合の値に対し30%となる漁獲圧（ $F_{30\%SPR}$ ）により代替すると定められた。

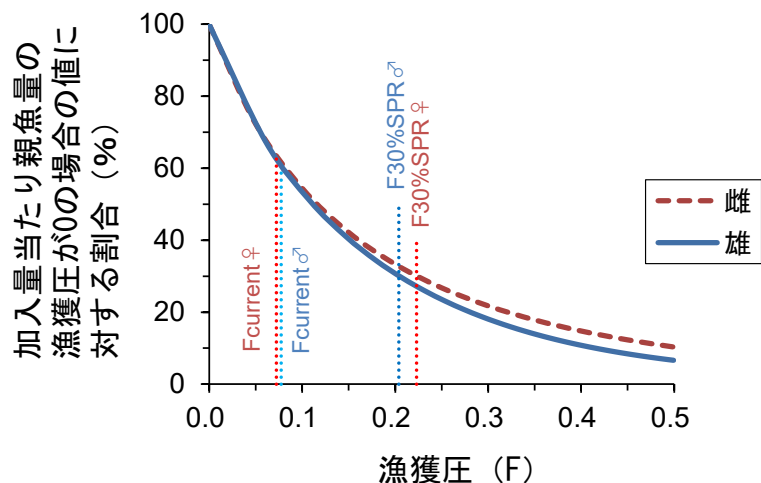


図4 MSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）の代替値（ $F_{30\%SPR}$ ）と現状の漁獲圧（ $F_{current}$ ）の比較

雄の $F_{current}$ （2016～2020年の平均）は0.08であり、 $F_{30\%SPR}$ （0.20）であった。雌の $F_{current}$ は0.07であり、 $F_{30\%SPR}$ （0.22）であった。雌雄ともに現状の漁獲圧は、 $F_{30\%SPR}$ を下回っている。

漁獲管理規則は $F_{30\%SPR}$ に不確実性を考慮して安全を見越すための0.8を乗じた値を用いた漁獲圧一定方策とされた。

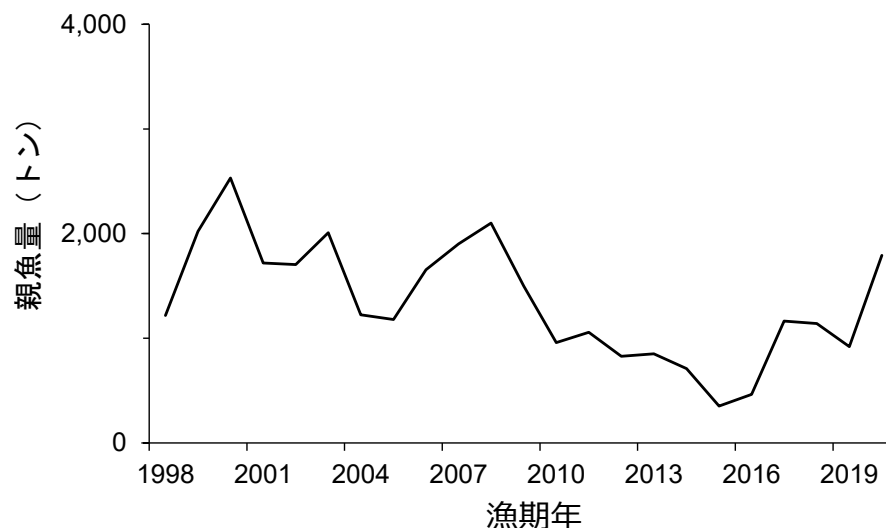


図5 親魚量の推移

かご調査に基づき推定された漁期後の雌の親魚量を示した。親魚量は2009年までは1,200～2,500トンで推移し、2010～2015年は減少していたが、2017年に増加し、2020年は1,792トンであった。

目標管理基準値はMSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）の代替値とした $F_{30\%SPR}$ の漁獲圧により達成される親魚量と定められた。ただし、将来予測に基づく推定値が得られるまで未設定である。



ズワイガニ (日本海系群B海域) ③

	親魚量 (トン)	説明
目標管理 基準値	-*	加入量当たり親魚量が、漁獲圧が0の場合の値に対し30%となる漁獲圧の水準とすることで達成される親魚量の水準
現状の値 (2020年)	1,792	かに籠調査に基づき推定された雌の漁期後の資源量

* 目標管理基準値は将来予測に基づく推定値が得られるまで未設定である。

2022年の ABC (トン)	2022年の 資源量予測 値 (トン)	現状の漁獲圧に 対する比 (F/F2016- 2020)	2022年の 漁獲割合 (%)
500*	3,200*	3.03	6.7
<p>漁獲管理規則はF30%SPRに不確実性を考慮して安全を見越すための0.8を乗じた値を用いた漁獲圧一定方策とされた。</p> <p>2022年の資源量の予測値と漁獲管理規則(0.8F30%SPR)に基づき算出された2022年のABCは500トンである。</p> <p>* ABCは十トン未満を、資源量は百トン未満をそれぞれ四捨五入した値である。</p>			